

(仮称) 栗東市手話言語及び障がい者のコミュニケーション支援に関する条例
当事者からの聞き取りであった主な意見

栗東市心身障害児（者）連合会 4/12（金） 11：45～12：30 （9名）

1. コミュニケーションについて

- ① 目が見えないと自分から声をかけられず、知っている人も無視してしまい、知らず知らずの内に失礼をしてしまうことがある。
- ② 耳が聞こえないので、市内のお店のフードコートに、呼び出しのバイブを設置してほしい。
- ③ 聞こえない人の中で、発声の訓練を受けて話すことができ、相手に意思を伝えることができる人はいても、聞こえないことにより、相手の言っていることを、そのまま理解できる人はいない。
- ④ 聴覚障がいは、外見からは分かりにくく、実際に話してみないと分からない障がい。自分から話しかけるのもなかなか難しい。
- ⑤ 聴覚障がい当事者として、周りの人に望むことは、手話を一緒に学んだり、手話通訳を交えてでも良いので、会話をしたい。
- ⑥ 手話は、週1回学習をしている。手話の番組も毎日テレビで見ているが、なかなか覚えられない。
- ⑦ 歳を重ね、新しい物事を覚えることが難しくなってきた。手話の習得はすぐには難しいので、みんなの筆談力を上げていってはどうか。
- ⑧ 手話を覚える際に、音楽を使うと覚えやすいのでは。

2. 理解・啓発について

- ① 障がいがある人の存在を知ってもらうことが大事だと思って、できるだけいろいろな場所に息子を連れ出していた。出会う人一人ひとりに声をかけて、息子のことを説明することもできないので、まずは「同じ社会の中で生活しているよ」ということを、子どもや周りの人に知ってもらう、慣れてもらうことから始まると思っている。本人は重度の障がいがあり、コミュニケーションをとることが難しい。よだれを垂れている息子の顔を覗き込む子どももいる。家庭の中では、日常のこととしてとらえているので、そんなに不便はない。

- ② 障がいがある子どもと一緒に過ごすことで、何か感じてもらえたら嬉しい。一緒に育っていかないと、思い違いが生まれたりする。
- ③ 手話は教育に取り入れないとなかなか広がらない。学校の授業の中に取り入れると、親も興味を持つようになる。
- ④ コミュニケーションを取りやすい社会にするためには、ガイドヘルパーや手話通訳者の育成が大切になる。

3. その他

- ① 手話講座の募集があるが、目が見えないため夜の参加は難しい。
- ② 当事者もスマートフォンでやりとりする機会が多いため、市で災害時などに有用な定型文アプリを作って欲しい。